

タブロイド地域紙「市民プレス」第65号(2014/7/5発行)の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次 PAGE 2 南北朝と足利政権 その確執は東国を戦乱の巷に！

-PAGE 5	建武政府の機構・・・	-PAGE 6	新政の混乱と瓦解
-PAGE 11	南北朝の併立	-PAGE 15	尊氏は征夷大將軍に・・・
-PAGE 17	天龍寺船の派遣	-PAGE 22	幕府滅亡後の鎌倉は・・・
-PAGE 24	南北朝の行方	-PAGE 26	足利氏の二元的体制・・・
-PAGE 28	観応の擾乱	-PAGE 32	足利直義は急死
-PAGE 37	入間川御陣に移る	-PAGE 38	南朝の後村上天皇は
-PAGE 40	足利尊氏は死去する	-PAGE 41	行宮の在った吉野山はいま



南北朝と足利政権 その確執は東国を戦乱の巷に！

後醍醐天皇の復帰

東国では、新田義貞によって幕府軍は壊滅し、都の出先機関だった六波羅探題は消滅した。後醍醐は京都に戻り、念願が叶って天皇自らの政治に親政を再開した。天皇の新政策は「建武の新政」といわれる。元弘三年(1333)六月のことである。但し翌年年号は「建武」と改められたので、建武を冠した新政と呼ばれる。

改元によって年号は交錯する

元徳三年(1331)に遡り、改元について付記しておく。

後醍醐天皇を中心とする倒幕計画が発覚し、八月、幕府による厳しい追及が行なわれた。このとき後醍醐は「元徳」から「元弘」へと改元して武家政権に詔書を下す。だが幕府は

これを認めず「元徳」を使い続けたが、鎌倉政権が滅亡に至るまで争った戦乱は、「元弘の乱」と呼ばれている。

後醍醐は、比叡山に向かうと見せかけて山城国笠置山で挙兵したが武家政権に捕えられる。九月、後醍醐天皇の皇太子が皇位を継承し、光厳天皇（のち南朝が樹立されると、「北朝」初代の天皇）が即位する。光厳天皇は、持明院統の後伏見天皇の第三皇子、暈仁親王で、後伏見上皇が院政を行なう。このとき皇太子には邦良親王（後醍醐天皇の皇太子）の嫡男康仁親王が立てられたので、両統迭立（二つに分裂したそれぞれの家系から、交互に君主を即位させること）の原則は維持された。

十月、後醍醐天皇は廃され、翌年の元弘二年（1332）四月、光厳天皇は「正慶」に改元したので、後醍醐が都に復帰するまで年号が混在することになった。このような年号の重複は、二つの朝廷が共存する「南北朝時代」へと続く。

自らの廃位を否定して・・・

北条氏の六波羅探題が消滅し、元弘三年／正慶二年六月、京都に帰還して内裏に入った後醍醐天皇は、光厳天皇の皇位を否定、光厳朝で行なわれた人事を全て無効にする。また

自らの「廃位」と「復位」を否定、文保二年（1318）から継続して在位していたと主張した。

摂政・関白を廃して親政が開始される。また、持明院統のみならず、大覚寺統の嫡流である邦良親王の遺児たちをも皇位継承から外し、本来傍流であった筈の自分の皇子恒良（二つねなが）とも）親王を皇太子に立て、父の遺言を反故にし、て自らの子孫により皇統を独占する意思を明確にした。

後醍醐の新政によって・・・

足利高氏は後醍醐天皇から勲功を認められて従四位下に叙され、鎮守府將軍・左兵衛督（兵衛府の長官）に任じられて三十箇所の所領を与えられた。また、このとき、天皇の諱「尊治」から一字が与えられ、「高氏」の名前を「尊氏」と改めた。

「高氏」という元の名前は、嘉元三年（1305）足利貞氏の次男として生まれたとき、足利家の慣例に従っ



絹本着色 後醍醐天皇御像（国宝）

清浄光寺（神奈川県藤沢市）蔵

て、得宗・北条高時の偏諱（功績のあつた臣下などに自分の名の一字を与える）を受けたものである。

一方、足利家の執事、高師直とその弟・師泰をはじめとして多数の家臣が政権に送り込まれた。

建武政府の機構

天皇の親政によつて、旧領回復令、寺領没収令などが発布され、記録所、恩賞方が設置され、九月には雑訴決断所がつくられる。

建武の新政が始まると、まだ幼かった第七皇子の義良（「よしなが」、とも読む）親王は、東北地方（陸奥及び出羽の二国）と北関東を統括して陸奥将軍府を成立するため、北畠親房・顕家父子に奉じられて奥州多賀城へと向かう。北畠親房は村上源氏の流れを汲む名門に生まれ、公卿に昇進して後醍醐天皇の篤い信任を得た。内大臣となつて恩賞方や雑訴決断所の頭人を任された吉田定房、同じく雑訴決断所の頭人を務めた万里小路宣房と合わせ「後の三房」と呼ばれる。

一方、尊氏の弟の直義は、建武の新政で左馬頭に任じられ、鎌倉府將軍成良（「なりなが」とも）親王を奉じて鎌倉に駐屯する（鎌倉將軍府の成立）。

年号が「建武」と定められ、建武元年（1334）の正月には、立太子の儀が行なわれて後醍醐皇子の恒良親王が皇太子となった。

建武の新政の混乱

天皇専制を目指す「建武の親政」は意欲的に進められたが、性急な改革、恩賞の不公平、朝令暮改を繰り返す法令や政策のため、貴族・大寺社から武士にいたる広範な勢力の既得権が侵害された。そのため訴訟や恩賞請求が殺到した。それらへの対応の不備、増税を財源とする大内裏建設や紙幣発行計画のような非現実的な経済政策は、政権批判へと繋がつていった。

武士勢力の不満が大きかつただけでなく、公家達の多くも政権に冷ややかな態度をとり、八月ころ、新政下の混乱した世相を風刺する二条河原落書が現われる。その無能振りが批判された。

六波羅探題の攻撃で戦功を挙げた護良（「もりなが」とも）親王は、建武の新政で征夷大將軍、兵部卿に任じられたが、討幕の功労者足利尊氏とは相容れず、尊氏を牽制する。また、後醍醐天皇とも反目したため、征夷大將軍の職を解任された。さらに皇位篡奪（奪取）を企てたとして捕えられる。護良は同年の冬、鎌倉に配流され、ついに鎌倉の將軍府にあつ

た尊氏の弟直義の監視下に置かれた。

武士に対する恩賞は・・・

建武の新政での恩賞や土地の所有権確定は繪旨第一主義、つまり天皇の決定を記した文書が最優先で、過去の経緯などは軽視、または無視された。そのため、公家・寺社と比べると、武士に対する恩賞は公正とはいえなかった。

新政の瓦解

朝廷が武士の要求に対して応えられないならば、朝廷には従わず、彼らの利害に適う新しい機構を望む事態となる。武家政権を復活したい、但しそれは、かつての鎌倉政権の中樞だった、得宗を中心とする北条氏の一門を主とするのではない。北条の御内人みうちびとといえども、すでに消滅してしまつた。そこで生き残つた武家の期待は、今や棟梁となつた足利尊氏へと向かい、高まつて行つた。彼はついに、建武の新政権に反旗を翻す。

中先代の戦い

建武二年（1335）七月、信濃国で、北条高時の遺児、時行を擁立した北条氏殘党の反乱が起こつて、時行の軍勢は鎌倉を一時占拠する（中先代の乱。「中先代」とは、先代の

北条氏と後代の足利氏との間の意）。直義は鎌倉を脱出したが、そのとき、独断で護良を殺害した。一方、尊氏は後醍醐天皇に征夷大將軍の官職を望んだが許されず、八月、天皇の許可を得ないまま尊氏は、軍勢を率いて鎌倉に向かう。後醍醐は、己むなく尊氏に征夷將軍の号を与えたので、尊氏は直義の軍勢と合流して、相模国箱根、相模川の戦いで時行を駆逐し、鎌倉を奪回した。

天皇に叛旗を・・・

尊氏はそのまゝ鎌倉に本拠を置いて独自に恩賞を与え、上洛の命令をも拒んで、独自の武家政権を創始する動きを見せ始める。十一月、尊氏は新田義貞を君側くんそくの奸かん（悪い家臣）として、その討伐を後醍醐に要請するが、天皇は逆に義貞に対して、彼が奉ずる尊良たかむね（「たかなが」とも）親王とともに、尊氏を討伐しよう命じた。

一方、義良親王を奉じて陸奥国に下向し、鎮守府將軍に任ぜられた北畠顕家が奥州から南下を始めた。そこで尊氏は後醍醐との関係を修復する挙に出た。赦免を求めて隠居を宣言し、寺に籠つて断髪したが、尊氏の側近であつた高師直や、弟の直義など、足利方が各地で劣勢となつて、彼らを救うため、尊氏は一転して天皇に叛くことを決意する。

一方、義良親王を奉じて陸奥国に下向し、鎮守府將軍に任ぜられた北畠顕家が奥州から南下を始める。そこで尊氏は後醍醐との関係を修復する挙に出た。赦免を求めて隠居を宣言し、寺に籠って断髪したが、尊氏の側近であった高師直や弟の直義など、足利方が各地で劣勢となったので、彼らを救うため、尊氏は一転して天皇に叛くことを決意する。

足利尊氏は都にのぼる

十二月、尊氏は新田軍を箱根・竹ノ下の戦いで破り、京都に向かって進軍を始める。建武三年（1336）正月、尊氏は入京を果たし、後醍醐天皇は比叡山へ退く。しかし、奥州の兵を引き連れ、わずか十六日という驚異的なスピードで駆けつけた北畠顕家の軍勢と、楠木正成・新田義貞の攻勢に曝され、敗れた尊氏は篠村八幡宮（現・京都府亀岡市）に撤退して京

都奪還を図る。

二月、摂津国「豊島河原（現・大阪府箕面市／池田市）の戦い」で、後醍醐側の新田義貞、北畠顕家たちと争う。『太平記』によれば、足利直義が率いる十六万の軍勢と、新田・北畠軍約十万が対峙したという。しかし、合戦に見切りをつけた尊氏は、京都を放棄して九州に下った。

九州に下って再び都へ

西下した尊氏は、筑前国で宗像氏範の支援を受け、「多々良浜（現・福岡市東区）の戦い」で天竺の菊池武敏らを破る。勢力を立て直した尊氏は、都に向かう途中、光厳上皇の院宣を得、西国の武士を急速に傘下に集めて東上した。五月の「湊川（摂津国湊川は現・神戸市）の戦い」で新田義貞・楠木正成の軍を破り、六月には京都を再び制圧する。楠木正成はこのとき自害したと伝えられている（二月、建武から延元に改元されたので、この戦いは、「延元の乱」といわれる）。

伝足利尊氏像

浄土寺蔵（広島県尾道市）蔵



足利尊氏の出自

平安時代後期のことになる。河内源氏の棟梁、源義家（八幡太郎義家）の四男・源義国は、下野国足利荘（栃木県足利市）を領して本貫（氏族発祥の地）とした。次男・

源義康以降の子孫が足利氏を称し、長男は新田氏の祖となった。のちに尊氏と激しく争った新田義貞とは同祖の関係なので、両者の出会いは運命的だった。尊氏は、鎌倉時代後期、幕府の御家人となった足利貞氏の次男として、嘉元三年（1305）七月廿七日に生まれた。

足利氏の武家政権が発足

八月、後伏見天皇の皇子、豊仁親王ゆたひひとが、光厳上皇の院宣により即位した（北朝二代の光明天皇）。足利氏は、比叡山に逃れていた後醍醐に和議を申し入れ、これに応じた天皇は、延元元年（南朝）／建武三年（1336）十一月、光明天皇に神器を譲つた。

尊氏は、その直後に「建武式目」十七条を定めて政権の基本方針を示し、新たな武家政権の成立を宣言する。源頼朝と同じく権大納言ごんたいなごんに任じられ、自らを「鎌倉殿」と称した。このとき、足利氏の武家政権は事実上発足したことになる。

南朝の成立／南北朝の併立

一方、後醍醐は十二月に京を脱出して吉野（現・奈良県吉野郡吉野町）に逃れ、光明に譲つた三種の神器は偽物であり、自らが帯同したものが本物であると称して独自の朝廷を樹立した。

京都の南に当たる吉野に拠点を設けたため「南朝」と呼ばれ、対して京都に残された朝廷は「北朝」として対立することになる。当時の記録にも「南朝」は「南方」とも呼ばれ、近世以来、何れが正統かが議論された。明治時代となり、皇室は南朝が正統とされた。

南朝方の新田義貞は北陸へ

その年の五月に遡る。「湊川の戦い」で北朝方に敗北した南朝方は比叡山に逃れた。このとき新田義貞と弟の脇屋義助は、後醍醐の二人の皇子、恒良親王と尊良たかなが（「たかなが」とも）親王らを伴って下山し、北陸を目指す。

寒中の木の芽峠越えでは多くの犠牲者を出したが、十月、越前国金ヶ崎城（現・福井県敦賀市）に入城した。しかし、義貞が入城した直後、越前国守護、斯波高経しばたかつねの率いる北朝方に城を包囲される。高経は守りの堅い金ヶ崎城を兵糧攻めにしたが、翌、延元二年／建武四年（1337）、尊氏は高師泰を大将、各国の守護を派遣して金ヶ崎城を激しく攻め立てる。義貞らは援軍を求めため、二人の皇子と新田義顕らを残し、兵糧の尽きた金ヶ崎城を脱出した。

三月、北朝方は金ヶ崎城に攻め込む。兵糧攻めによる飢餓と疲労のため、城兵は次々に討ち取られ、ついに落城する。尊良親王・新田義顕は自害し、恒良親王は北朝方に捕縛された。

新田義貞死す

金ヶ崎城を失なつた義貞は、杣山城（現・福井県南条郡南越前町）を拠点として四散した新田軍を糾合して対抗し、弟義助は越前国三峯城（現・福井県鯖江市）を拠点として、足利軍を牽制した。

翌、延元三年／建武五年（1338）閏七月、義貞は越前国藤島の燈明寺（現・石川県白山市）で、斯波高経の軍勢と交戦中に戦死する。南朝方一筋に転戦を重ねた末の最期であつた（戦死の顛末は『太平記』に詳しく叙述されている）。

南朝二代の後継者として・・・

既述したように、後醍醐の第七皇子、義良親王は、建武の新政が始まると、北畠父子に奉じられて奥州多賀城へと向かつた。建武元年（1334）五月、多賀城で親王となり、翌年、足利尊氏が新政から離反すると、北畠親子とともに尊氏討伐のために京へ引き返す。

都と奥州とを往復する

延元元年（1336）（延元の乱のため、二月に改元）三月、行在所の比叡山で元服し、三品（品位は親王・内親王の位階のこと、三品は三位）陸奥太守に叙任された。尊氏が敗れ

て都から九州落ちすると再び奥州に赴くが、延元二年／建武四年、多賀城が襲撃されて危険となり、靈山（現・福島県伊達市／相馬市）に難を避ける。八月、再度上洛することとなる。

北畠顕家は力尽きて・・・

後醍醐の命を受けた顕家は、親王を奉じて南下し、足利方と戦つて、十二月、鎌倉を攻略する。このとき、幼い義詮（尊氏の嫡男）を補佐するため関東執事に任命されていた斯波家長が討ち取られた。翌年の延元三年（1338）一月、宮方はさらに西に向かい、美濃国「青野原（現・岐阜県大垣市）の戦い」で足利方を破る。

しかし、京都の足利尊氏は高師泰・佐々木道誉（京極道誉）・佐々木氏頼（六角氏頼）・細川頼春ら五万の軍勢を差し向けた。北畠勢は長期の行軍と度重なる戦闘で疲弊してゐたので、新手の足利勢と戦う力は無く、伊勢・伊賀国を経て吉野に向かう。体勢を立て直して高師直が率いる足利勢と戦つたが、大和国般若坂で敗れた北畠顕家は、五月、和泉国石津で戦死した（「石津」現・大阪府堺市IIの戦い）。

義良親王一行は奥州に向かう

「青野原」で足利方を破り、伊勢・伊賀方面に転進したのち、義良親王は大和の吉野行宮に入る。一方、この年九月、皇子たちを各地に派遣して南朝勢力の結集に努めていた父

天皇は、義良親王と宗良親王とを、北畠親房・顕信（顕家の弟）に奉じさせて、三たび奥州に向かわせた。

ところが、伊勢国大湊（現・三重県伊勢市）を出航した一行は、途中暴風に遭って離散し、親王の船は伊勢に漂着する。また宗良親王は遠江国（現・静岡県西部）に漂着し、北畠親房は常陸に上陸した。ここから親房は南朝方だった小田氏を頼りにして、彼の居城、小田城（現・茨城県つくば市）に移り、東国の勢力挽回を図る。

この地で北畠親房は、『神皇正統記』を執筆したいわれている。天皇と公家が日本国を統治して武士を統率することが理想の国家像であるとして、歴代天皇の事績を述べ、本書は後村上に献呈された。

尊氏は征夷大將軍に

延元三年（南朝）／暦応りやくおう二年（「れきおう」とも）元年（北朝）（1338）、北畠顕家・新田義貞らが次々と戦死し、北朝方は軍事的に圧倒的な優位に立つ。八月、足利尊氏は光明天皇から征夷大將軍に任ぜられる。

讓位を受けて踐祚する

一方、翌、延元四年／暦応二年（1339）三月、吉野に戻った義良親王は皇太子となり、

八月には父天皇の讓位を受けて踐祚した。

後醍醐天皇は崩御される

後醍醐天皇は劣勢を覆すことができないまま病に倒れ、吉野金輪王寺きんりんのおうじで、朝敵討滅・京都奪回すべし、と遺言して崩御された。享年五十二才（満五十才）。

足利尊氏は天龍寺を創建する

尊氏と弟・直義は、崩御した後醍醐天皇の菩提を弔うために、敵味方の立場を超えて天龍寺の創建を決意する。しかし、成立して間もない足利政権は、財政的に逼迫した状況にあり、財源を確保することができなかった。

そこで、興国二年（南朝）／暦応四年（1341）中国・元への貿易船によって造営費を賄うことを計画する。

翌、興国三年／康永元年（暦応五年四月、天変・疫病により康永に改元された）八月、神社の造営と修復・増築の費用を獲得することを名目とした寺社造営料唐船、「天龍寺船」が元に派遣された。

天龍寺船の派遣

天龍寺を創建するために・・・

後醍醐の崩御に際して、その菩提を弔う寺院の建立を強く勧めたのは、当時、武家からも尊崇を受けていた禪僧・夢窓疎石であった。

尊氏と弟・直義は、天龍寺の創建を決意して、当初は安芸・周防両国の公領からの収入をその費用に当てる計画だった。しかし、成立して間もない足利政権は財政が逼迫していたため、中国・元への貿易船によって莫大な造営費を賄うことを計画する。

寺社造営料唐船は・・・

鎌倉幕府の公認で元に送られた民間の貿易船で、社寺の造営料を得ることを目的としていた。正中二年（1325）には鎌倉の建長寺の造営のため、「建長寺船」が派遣され、その前後にも数隻が送られていた。しかし、元との交易は十年近く途絶えていたので、貿易船の派遣は大きな賭けだった。

直義は、日元貿易に習熟していた博多商人・至本しほんに実施を依頼し、貿易の結果に関わらず、現金五千貫文の納入を約束させた（この方式は、後に「勘合貿易」へと展開された）。幕府が

商船にお墨付きを与える代わりに一定額の納税を課して、康永元年（1342）八月、「天龍寺船」は元に渡航した。この方式は、後に「勘合貿易」へと展開された。予定通り翌康永元年（1342）八月「天龍寺船」は元に渡航した。十月、明州に入港した船は、果たして海賊船と見なされたが、上陸を許され、交易に成功する。

沈没船の発見

天龍寺船を始め、鎌倉・室町時代の日中貿易を考察する上で、欠かせない資料が発見された。

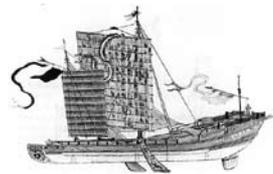
昭和五十一年（1976）韓国の全羅南道新安郡沖しんあんぐんの海底から、大量の荷物を積んだジャンク船が発見された（新安沈船）。引き揚げられたのは白磁、青磁の天目茶碗などおよそ一万八千点におよぶ陶磁器や、約25トン・八百万枚もの銅銭、そして三百数十点もの積荷木簡が含まれていた。この船は東福寺（現京都市東山区）造営を名目とした貿易唐船と見られているが、積荷木簡の中には「綱司しうし」（交易船長の意）という字を記すものが百点もあり、その多くは「綱司私」と記され、商人の私的交易品が多く含まれていたことが伺える。

天龍寺庭園



海底から発見されたジャンク船は・・・

耐波性が優れた木造の帆船で、船体中央を支える構造材の竜骨（キール）が無く、船体は多数の隔壁で区切られている。
多数の割り竹を横方向に挿入した帆は横風に対して安定性が良く、突風の時でも素早く帆を下ろすことができるという。



天龍寺は、大覚寺統（亀山天皇の系統）の離宮であった亀山殿の跡地に建設され、後醍醐天皇七回忌の康永四年（1345）、落慶供養が行なわれた。京都五山の第一として栄え、広大な寺域をもっているが、何度もの火災によって当時の建物は全て失われ、方丈の西側にある夢窓疎石作の庭園（特別名勝・史跡）にのみ創建当初の面影が窺われる。

京都の將軍居宅は・・・

後醍醐と対立して京都に武家政権を開いた初代將軍・足利尊氏は、北朝を後見するために住居として「二条万里小路第^{までのこうじだい}」を構えた。その跡地（現・京都の「お御池通り」の北、「高倉通り」の西、中京区高倉通御池上ル東側に所在）には、「足利尊氏邸・等持寺跡」の碑が建てられている。

尊氏は、暦応四年（1341）、ここに足利氏の菩提寺として「等持寺」を建立したので、跡地の碑には双方が併記されている。

足利氏の菩提寺

尊氏は、その二年後の康永二年（1343）に、京都市北区等持院北町に別院北等持寺を建立した。尊氏の死後、ここには墓所が設けられ、「等持院」と改称される。のちの応仁の乱で本寺が焼失したので、別院だった現在の等持院は本寺となった。その靈光殿には、歴代の足利將軍木像が安置されている。



足利尊氏木像 京都市北区 等持院

「福海興国禪寺」の創建

康永三年（1344）、尊氏は、京都西賀茂の正伝寺から、学識の深い在庵圓有を招聘して、現・神戸市兵庫区西柳原町に、「福海興国禪寺」を創建した。建武三年、尊氏は兵庫の海から九州に落ち、その後また兵庫に上陸し、幕府を開いたことから、尊氏にとつて兵庫の海は「福の海」であるという意味が、この寺の名称に込められているという。

直義の三条坊門殿は・・・

既述したように、尊氏は京都の中京区高倉通御池上ルに邸宅を構えたが、弟の直義も邸宅を構えたことが知られている（『梅松論』の記述では、すでに建武三年（1336）には所在していた）。「三条坊門殿」といい、尊氏の邸の南側で、三条坊門（今の御池通り）に面していた（なお、尊氏の「二条万里小路第」も、三条坊門Ⅱ今の御池通りⅡに面していたため「三条坊門第」と呼ばれることもあつて紛らわしいが）。

足利政権において、尊氏は政務を直義に任せ、自らは軍事指揮権と恩賞権を握つて、武士の棟梁として君臨した。尊氏は統治権的支配権を所管するが、政務の大半を直義に委任したので、直義は副將軍とも呼ばれ、両頭政治だった。そこで三条坊門殿は、幕府の中心機能を果たしていたようだ。

直義邸のちに・・・

貞和五年（1349）、失脚した直義は出家して邸を明け渡し、代わり鎌倉にいた尊氏の嫡男・義詮が父の命で京都に戻り、三条坊門殿に入った。

しかし、観応かんのうの擾乱じょうらんで直義は敗れ、三条坊門殿は文和元年（1352）二月、京都に攻め入つた南朝軍の攻撃によつて炎上した。

幕府滅亡後の鎌倉は・・・

関東執事の任命

元弘三年（1333）に遡る、後醍醐の新政が始まつた翌年、建武政権は「鎌倉將軍府」を設置し、足利直義が実権を握つた。建武二年（1335）、北条高時の遺児北条時行が鎌倉を占拠した（中先代の乱）が、尊氏は八月、時行を駆逐して鎌倉に入った。十二月、尊氏は建武政権と袂を分かつて都に向かい、嫡男の義詮よしあき（のちの二代將軍）を鎌倉に残す。

足利義詮の母は、鎌倉幕府最後の執権・北条守時の妹で正室の赤橋登子、元徳二年（1330）六月の生まれだったので、尊氏は、幼ない義詮を補佐するために斯波家長を関東

執事に任命した。しかし、建武四年（1337）、北朝を立てた尊氏を討伐するため、南朝方の北畠顕家が、大軍を率いて南下してきた。家長はこれを鎌倉で迎え撃ち、敗北して戦死する。翌年、尊氏の命令で、戦死した斯波家長の後任として上杉憲顕が関東執事に就任する。ところが、暦応二年（1339）に、尊氏の側近、高師直の従兄弟に当たる高師冬と交替するように命じられた。翌、暦応三年に、上杉憲顕は再び関東執事に復帰したが、以後師冬との二人制を取る事になる。

「山内上杉家」の始祖として

上杉憲顕は、足利氏の関東支配の中心に位置して、関東上杉氏発展の基礎を築いた人物である。足利尊氏・直義兄弟の母清子は父方の叔母であり、尊氏・直義とは従兄弟の關係にあり、直義とは同い年だった。父親の上杉憲房は、鎌倉政権の打倒に貢献したが、建武三年（1336）一月、京都四条河原の戦いで、南朝方に敗れて死亡、弟の憲藤も延元三年／暦応元年（1338）に南朝方の北畠顕家と戦って亡くなったため、一家の後継者となる。

上杉氏は元々公家であったが、武家の足利氏と結び付いて関東の新興勢力となり、従兄弟の上杉重能（宅間上杉家）や上杉朝定（二橋上杉家、後の扇谷上杉家）、弟の憲藤（犬懸上杉家）などの上杉諸家は、憲顕の継いだ「山内上杉家」を中核として、関東一帯で勢力抗争を展開

することとなる。

南北朝の行方・・・

延元四年／暦応二年（1339）八月に即位した南朝二代の後村上天皇は、若年ではあったが、畿内の寺社や武士に対して精力的に綸旨を発し、南朝の安寧祈願や所領安堵・給付、軍勢催促や褒賞を行なった。

また九州に拠点をつくる

懐良親王（1329?~1383）は、南朝の將軍として、肥後国隈府（現・熊本県菊池市）を拠点として征西府の勢力を広げ、九州における南朝方の全盛期を築いた。

建武新政は瓦解したが、再挙を図るべく後醍醐天皇は、まだ幼い懐良親王を征西大將軍に任命して九州に向わせたのであるが、九州への下向の時期については、延元元年／建武三年（1336）とも、暦応元年／延元三年（1338）か、またはその翌年か、とする諸説がある。

親王は五条頼元らに補佐されて伊予国忽那島（現・愛媛県松山市忽那諸島）に渡り、この地の宇都宮貞泰や瀬戸内海の子賊衆である熊野水軍の援助を得て三年も滞在したという。

薩摩に上陸して肥後に向かう

懐良は、興国三年／康永元年（1342）五月、薩摩国（現・鹿児島県）の山川港に上陸すると、谷山城主・谷山隆信が一行を迎えた。この城に在って、北朝・足利方の島津氏と対峙しつつ九州の諸豪族の勧誘に努める。ようやく肥後国（現・熊本県）の菊池武光らを味方につけ、正平三年／貞和四年（1348）、菊池氏の居城、隈府城（現・熊本県）に入って征西府を開き、九州攻略を開始した。

そのころ九州では・・・

正平四年／貞和五年（1349）、九州に逃れた直義の養子、足利直冬は、筑前国などの守護職の少弐頼尚に娘を娶せて擁立される。頼尚はかつて、筑前国多々良浜の戦いで肥後の菊池武敏らを撃破し、京都を目指した尊氏に従って畿内まで従軍し、恩賞として筑前・豊前・肥後・対馬国などの守護職を与えられた武将である。

足利尊氏が京都奪還に失敗して九州に落ち延び、多々良浜の戦いで勝利して東上したさいに、一色範氏を大宰府に残したのが始まりといわれ、以後足利方の拠点となる。

南朝方の懐良親王は・・・

中央の政治を反映して、尊氏方の九州探題・一色範氏と、九州に勢力を拡大した足利直

冬軍とも対立した南朝方は、鼎立状態で、これらの勢力と攻防を繰り返した。

四条畷で高師直に敗れ・・・

一方、正平三年一月、「四條畷（現・大阪府四條畷市・大東市）の戦い」で、楠木正成の子、楠木正行・楠木正時兄弟は、圧倒的な兵力の高師直の軍に敗れ、兄弟は自決する。

勢いに乗った足利方は、南朝の本拠に侵入して吉野行宮（現・奈良県吉野郡吉野町）を焼き払い、後村上天皇は賀名生（現・奈良県五條市西吉野村）に逃れた。吉野宮が陥落して、南朝の本拠の衰勢は覆い隠せなくなる。

北朝三代の天皇が即位する

正平三年／貞和四年（1348）に光厳天皇の第一皇子が立太子して、同年十月、光明天皇から譲位され、北朝三代の崇光天皇が即位、光厳上皇が院政を敷いた。

足利氏の二元的な体制

初期の足利政権では、家宰的な役割を担っていた執事職の高師直が、軍事指揮権を持つ將軍尊氏を補佐する一方、尊氏の弟足利直義が専ら政務を担当する二元的な体制を執っていた。政権だけに止まらず、対立する南朝と北朝、それを支持する武家や、公家の確執などに

も及び、尊氏とその家宰対直義の対立を核とする足利家の内訌（内紛）は、取り巻く武士たちを巻き込んで、南北朝の均衡にも影響を与える。

高師直のクーデターは・・・

正平四年／貞和五年（1349）閏六月、直義側近の上杉重能・畠山直宗らの讒言（ざんげん）によって、師直の執事職が罷免される。解任された師直は、八月、師泰とともに兄弟で挙兵して直義邸を襲撃する。さらに直義が逃げ込んだ尊氏邸を包囲し、尊氏に対して直義らの身柄引き渡しを要求する。尊氏の周旋によって和議を結ばれたが、直義を出家させて引退へと追い込み、幕府内における直義ら反対勢力を一掃した。ただし、この騒動は師直と尊氏の示し合わせによるものともいわれる。

基氏を下して鎌倉府を強化

そこで尊氏は、十一月、直義の業務を継ぐ後任者として、嫡男の義詮を鎌倉から京都に移す。軍事権をもつ次期将軍とするためでもある。一方、義詮の後任として、同母弟の基氏を鎌倉に下し、「鎌倉公方」（初代）として「鎌倉府」を機能させた。

基氏は尊氏の四男に当たり、義詮の同母弟である。但し、まだ十才に過ぎなかったため、上杉憲顕・高師冬が執事（後の関東管領）として幼い基氏を補佐した。高師冬は高師直の従兄弟である。

鎌倉府の長官は

「鎌倉公方」は、征夷大將軍が関東十ヶ国の出先機関として設置した「鎌倉府」の長官に当り、「鎌倉御所」または「鎌倉殿」とも呼ばれた。当初、正式な役職名は「関東管領」で、これを補佐するために任命されたのが「執事」職だった。ところが、執事家が力を得て関東管領となったので、対する本来の「関東管領家」が「鎌倉公方」となったという事情があるようだ。

直義対高兄弟間が緊迫する

高師直のクーデターによって、足利直義は出家を余儀なくされ、恵源と号したが、十二月、かつての直近で、配流されていた上杉重能・畠山直宗が、師直の配下に暗殺されたことから、両者間の緊張は高まった。

観応の擾乱

正平五年／貞和六年（1350）の二月に「観応」に改元される。尊氏自身の子であるが、直義の養子となっていた足利直冬は西国で足場を築いたが、尊氏に従わなかった。直冬を討つため、尊氏が中国地方に遠征すると、十月、その留守に乗じた直義は、京都を脱出し

て大和に入り、高師直・師泰兄弟の討伐を呼びかけ、十一月、畠山国清らを味方に付けて決起した。擾乱の始まりである。

直義は南朝方に・・・

十二月に東国では、関東執事を務めていた上杉憲顕と高師冬とが互いに争い、憲顕は師冬を駆逐して執事職を独占する。直義方のこうした動きのために、尊氏は、直冬の討伐を止めて備後から軍を返し、高兄弟も加わった。北朝の光厳上皇による直義追討令が出されると、直義は一転してそれまで敵対していた南朝方に降つて対抗する。

優勢だつた直義軍は都に・・・

正平六年／観応二年（1351）一月、直義軍は京都に進撃したので、留守を預かる義詮は備前の尊氏の下に落ち延びた。二月、尊氏軍は京都を目指したが、「播磨光明寺合戦」及び「摂津打出浜（現・兵庫県芦屋市）の戦い」で直義軍に相次いで敗北する。南朝方を含む直義の優勢を前にして、尊氏は直義との和議を図った。両者は表向きでは合意したが、高兄弟は摂津から京都への護送中に、待ち受けていた直義派の上杉能憲の軍勢によつて、摂津武庫川（現・兵庫県伊丹市）で謀殺される。

長年の政敵を排した直義は義詮の補佐として政務に復帰、三月、直冬は直義の求めに応じた尊氏から北朝方の鎮西探題に任命される（但し南朝方は、興国七年／貞和二年ハ1346V八月、九州に下向した初代九州探題の父、一色範氏のりうじから譲られて探題となつた直氏）。しかし、直冬はその後南朝に帰伏し、一方、尊氏が北朝を立て直したため、一色直氏は名目の上では北朝方となり、それぞれの探題の立場は逆転した。

直義は再び尊氏に抵抗する

尊氏に対する直義の立場は好転したかに見えた。しかし、以前とは変わらぬ直義の守旧的な政治は現実在即していると言い難い、との批判は高まつて、尊氏派に宗旨を替える武將が続出した。

尊氏との反目は再び、ついに直義は政務から引退することとなり、八月、京都を脱して北陸、信濃を経、鎌倉を拠点として反尊氏勢力を糾合する。

「正平の一統」は・・・

直義は関東・北陸・山陰を抑え、また西国では直冬が勢力を伸ばしていたので、尊氏は直義と南朝との分断を図る。直義・直冬追討の論旨を要請するため、北朝が保持していた三種の神器を南朝に渡し、政権を返上することなどを条件として、南朝に和議を提案した。その年十月、尊氏は論旨を得、この和睦によつて南朝の勅使が入京して、十一月、北朝

の崇光天皇や皇太子直仁親王は廃位される。また、年号も北朝の「観応二年」が廃されて南朝の「正平六年」に統一される。これを「正平一統」と呼ぶ（後に足利義満により再度、南北朝統一が図られ、「明德の和約」といい、正平一統に合わせて「元中一統」と呼ばれる）。十二月には神器が南朝方に回収され、政権の南朝側への無条件返還となった。

南朝から追討令が・・・

吉野を本拠とする南朝の勢力は復活するかに見えた。しかし、南朝方は強気になったため和議は破談となり、再び尊氏は弟の直義を討つ事態へと展開する。

尊氏は南朝と和睦して、直義・直冬追討令を得た。そこで義詮を京都に残し、東海道を東進して鎌倉に向かう。一方、京都を八月に脱して反尊氏勢力を糾合した直義は、上杉憲顕らの軍勢とともに西進して、十二月、東海道の難所だった駿河国薩埵峠（現・静岡県静岡市清水区）、相模国早川尻（現・神奈川県小田原市）などで激しく戦った。

決戦は「羽根倉」で・・・

そのころ、直義方の武将、高麗経澄こまつねずみが突然尊氏方に寝返って、武州鬼窪（現・埼玉県白岡町）で兵を挙げた。高麗氏は、王族を祖先とする渡来系の氏族だが、このころには有力な武蔵国の武士団となっていた。府中を目指して羽根倉道（鎌倉街道の上道と中道を繋いでいた）を進んだ経澄は、羽根倉橋（現・埼玉県志木市）に差し掛かると、迎え撃つたのは、直義方に属していたその地の武将、難波田九郎三郎である。この局地戦では激しい戦闘が繰り広げられたが、難波田勢は敗北し、九郎三郎と多くの部下が討死した（「高麗経澄軍忠状」へ現・埼玉県日高市の町田氏所蔵に書き留められている）。ただし、その後尊氏と直義の和解によって難波田氏は復活して、再びこの地（現・埼玉県ふじみ市）で繁栄する。一方の高麗経澄は、さらに各地を転戦し、軍功を上げて鎌倉に入ったという。

足利直義は急死

尊氏は勝利して、翌年の正平七年／観応三年（1352）一月、直義を鎌倉に追い込んで降伏させた。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義は、二月に急死する（病死とされているが、『太平記』のみは尊氏による毒殺であると記している。享年四十七才）。その後擾乱は終息に向かったが、一方で南朝の激しい攻勢は続いたので、目は離せない。

京都・鎌倉は南朝方の手に

南朝方は、京都と鎌倉から北朝、足利勢力の一掃を画策する。

かつて義長親王を奉じて陸奥将軍府に派遣された北畠親房は、そのころ吉野に在り、彼を中心として計画が進められた。尊氏が直義を追討すべく関東に向かった隙を突くことで、

同年二月、京都を奪回する作戦が開始された。

まず京都を攻撃する・・・

後村上天皇は賀名生士の行宮を発し、河内国東条（現・大阪府富田林市）を経て摂津国住吉（現・大阪市住吉区）に至り、閏二月十九日、山城国男山（現・京都府八幡市）に入った。楠木正儀（正成の三男）、北畠顕能は、「七条大宮の戦い」で足利義詮を破る。義詮は近江に逃れたので、南朝方は南北朝分裂以降初めて京都奪還に成功し、後村上天皇は、北朝の光厳、光明、崇光上皇、直仁親王を男山に連れ去った。

鎌倉に向かつて・・・

殆んど同時期のこと。南朝方は尊氏の征夷大將軍の職を解任して挙兵し、鎌倉に向かつて進軍した。閏二月十五日、新田義貞の遺児、新田義興・義宗も鎌倉奪還を目指し、従兄弟の脇屋義治や、南朝に降伏した北条時行らと相携え、上野国で挙兵した。また尊氏に代わって征夷大將軍に任じられた宗良親王も信濃国で挙兵する。

尊氏は反撃に転じた・・・

鎌倉に在った尊氏は、一旦武蔵国まで引いたため、十八日、南朝軍は一時的に鎌倉を奪回し、京都・鎌倉の双方を支配下に置いた。

「武蔵野合戦」の行方は・・・

新田義興ら南朝勢が鎌倉街道を南下したとき、尊氏に反発する直義派の武将も多く参加したといわれる。尊氏は鎌倉を出て、十七日には武蔵国狩野川に布陣し、迎え撃つ構えを見せる。新田義興は閏二月十八日鎌倉に入り、十九日関戸で、二十二日は金井原（現・東京都小金井市）・人見原（現・東京都府中市）で足利勢と戦い、合戦では双方とも相当の損害を出したという。

新田・北条氏らは鎌倉に入ったので、尊氏は武蔵国石浜（現・東京都台東区か、ただし場所には諸説あり）に撤退し、勢力の回復を図ったが、二十三日、新田義宗は笛吹峠（現・埼玉県鳩山町嵐山町境）に陣を敷き、宗良親王らの信濃勢や、元・直義派だった上杉憲顕と合流した。

宗良親王は信濃へ逃びずる

二十八日、足利勢と新田勢は、高麗原（現・埼玉県日高市）・入間河原（現・埼玉県狭山市）・小手指原（現・埼玉県所沢市）で相見え、合戦では足利勢が勝利、敗れた義宗は越後方面に、また宗良親王は信濃方面に落ち延びた。

一方、金井原・人見原の戦いの後に南朝方に脱出していた新田義興らは、三浦氏の支援

を受けて再び鎌倉に入ったが、義宗勢の敗北を知って三月二日には鎌倉を脱出して相模国河村城（現・神奈川県足柄上郡山北町）に立て籠もる。十二日尊氏・基氏は鎌倉を奪還し、敗れた新田義興と脇屋義治は越後に逃亡する。北条時行は鎌倉付近で足利基氏の手の者に捕らえられ、翌年龍ノ口で処刑された。

南朝方は鎌倉を後にする

一時は南朝方が京都・鎌倉の両方を占領したが、一連の合戦によって、関東では短期間に鎮圧される。その結果、東国の南朝方および直義派の勢力は衰退し、以後それらの勢力に鎌倉が渡ることは無かった。

北朝二代・後光厳天皇即位

この年、正平七年閏二月、南朝方が撤退するとき三上皇が拉致されたため、北朝では公事が停止し、院宣を発する治天の君や三種の神器も無い状態だった。そこで足利義詮は、北朝再建のために要請して、八月、光厳天皇の第二皇子弥仁が踐祚し、後光厳天皇として即位する。

尊氏は鎌倉滞在を延長して

上方での南朝方の活動は続いたが、北朝は劣勢を脱し、尊氏は翌年七月まで鎌倉に滞在

して、関東の情勢を鎮めることに注力した。九月後光厳天皇の即位による代始改元で、「観応」から文和（ぶんな、ぶんわ）となる。

鎌倉公方とその補佐は・・・

鎌倉公方の基氏を補佐する執事職（関東管領）は空白となっていたが、正平八年／文和二年（1353）、畠山国清が任命され（在任…1353～1361）、以後足利基氏・畠山国清の体制で鎌倉府は運営されていくこととなる。

この人、畠山国清

畠山氏は足利氏の支流である。そこで国清は、足利尊氏に従って、建武の新政が瓦解して離反した後の南朝と戦った。和泉、紀伊および河内の守護となつて畿内に勢力を広げ、観応の擾乱では、足利直義が吉野の南朝に与すると国清も従つたが、後に尊氏方に付き、武蔵野合戦にも参戦している。

畠山は伊豆の守護ともなり、鎌倉府を武蔵入間郡入間川に移す。さらに武蔵国の守護となり、遠縁の秩父氏ら武蔵平一揆を率いて権勢を振るう。なお正平十三年／延文三年（1358）には、南朝方の新田義興（新田義貞の次男、二十八才）を多摩川の矢口渡で謀殺した。

入間川御陣に移る

正平八年、鎌倉公方の足利基氏は宿营地（「入間川御所」）を設置したので、基氏は「入間川殿」とも呼ばれた。観応の擾乱後の上杉氏勢力に対抗するため、この地に移された鎌倉府は、正平十八年／貞治二年（1363）まで、九年間にわたって存続した。

宇都宮氏を支援するため

既述したように、尊氏は駿河国薩埵山の戦いで弟の直義を破って関東を奪還したが、この合戦では、関東執事だった上杉憲顕が直義方として戦った。尊氏は、上杉憲顕を追放して、彼が守護を務めていた上野・越後は下野の宇都宮氏綱に与えられる。

氏綱は、下野国宇都宮氏当主で、父が南朝側に仕えたのに対して、彼は足利尊氏の家臣となり、尊氏から偏諱（「氏」の字）の授与を受けて「氏綱」と名乗った。尊氏の下で武功を挙げ、鎌倉公方足利基氏の家臣となる。

この時期の鎌倉府の体制は「薩埵山体制」といわれ、氏綱に与えられた上野・越後では、上杉氏や新田氏の支持者が新守護に反抗する可能性が高かった。そのため畠山国清は、入間川と鎌倉街道の交点近くに鎌倉府の機能を移転させ、基氏を奉じて北関東の平定に当た

ろうとした。

南朝の後村上天皇は・・・

上記したように、正平七年／観応三年（1352）閏二月十九日、京都に入って足利義詮の軍を破り、南北朝の分裂後、十七年振りに京都を奪還したが、三月には足利方の反撃に遭い、都を放棄して山城国男山に立て籠もる。南朝軍は、北朝の光厳、光明、崇光上皇、直仁親王を男山に拉致した。五月、義詮軍の包囲から辛うじて脱出した後村上天皇は、三輪社・宇陀を経て、ようやく賀名生に帰還する。また、北朝の上皇たちを賀名生に連行した。正平八年／文和二年（1353）六月、南朝方の楠木正儀、山名時氏らは再び都を占拠したが、維持できずに撤退する。

動乱の時代に・・・

首尾一貫して尊氏派だった武将もいたが、直義や真冬に与し、あるいは南朝方に移るなど、離反と帰参を繰返す守護大名は少なくなかった。正平九年／文和三年（1354）五月、直義の養子、直冬は南朝に帰順して反尊氏派となり、旧直義派や南朝に接近した斯波氏頼、桃井直常、山名時氏、大内弘世らに支援され、軍勢を率いて九州から京都に向かった。

南朝方は行宮を移し・・・

後村上は、同年（1354）十月、河内天野（現・大阪府河内長野市天野町）に移り、金剛寺を行宮と定める。翌年の正平十年／文和四年（1355）の一月には、南朝方となった直冬を立てて京の奪還を目指したが、尊氏・義詮の軍に敗れた。

真冬と尊氏との激闘

正平十年／文和四年（1355）、真冬は南朝と協力して京都を奪還し、山名氏の軍勢と共に、一ヶ月余りにわたって、尊氏、義詮の軍勢と激戦を展開した。しかし、主力の一角だった山名勢が崩壊したため、直冬方は破れる。直冬は洛中で戦ったが、三月、義詮、尊氏勢が本陣に突撃したため敗走した。

この合戦では、足利政権の守護大名、佐々木道誉（どうよ）と赤松則祐（のりすけ）（そくゆう、とも）の補佐をうけた義詮の活躍が非常に大きかった。しかし最終的には、尊氏自らが率いた軍勢が直冬の本陣に突撃して勝利した。

佐々木道誉はのちの義詮政権下で政所執事を務め、執事（後の管領）の任免権を握り、事実上幕府の最高実力者として君臨する。一方の赤松則祐は、正平十六年に南朝方が京都を制圧したとき、義詮の嫡男、四才だった義満を播磨白旗城で保護し、以後長く三代將軍

の信頼を得た。

足利尊氏は死去する

尊氏は直義の死後病氣勝ちで、政務は義詮を中心に執られていた。

尊氏は正平十三年／延文三年（1358）四月三十日、京都二条万里小路第（現在の京都市下京区）にて、波乱万丈の生涯を閉じる。享年五十四才。直冬との合戦で受けた矢傷による腫れ物もとだという。

尊氏は文人だった・・・

その翌年（1359）のことになる。尊氏の執奏（取り次いで奏上すること）により、後光厳天皇の命令で勅撰和歌集「新千載和歌集」が成立した。

尊氏は武將、政治家として、しかも文人としても足跡を残し、勅撰集の武家による執奏という先例を打ち立てた。また勅撰に准ぜられる連歌集の「菟玖波集（うづは）」に六十八句が入集している。地藏菩薩を描いた絵画なども伝わっており、画才にも優れた人物だった。

吉野行宮跡地の今昔

延元元年／建武三年（1336）十二月、建武政権が崩壊し、幽閉されていた後醍醐天皇は京都を脱出、穴生を經由して吉水院に入る。数日後近くの金峯山寺の塔頭（子院）・実城寺を「金輪王寺」と改名して行宮（行在所）と定めた。ここは金峯山などの修験者との連携ができ、一方、山道を利用するので、武家政権には南朝側の掌握が困難になり、京都の奪還を目指す上で要になる土地だった。

だが、後醍醐天皇は延元四年／暦応二年（1339）八月、この行宮で後村上天皇に譲位し、直後に崩御される。正平三年／貞和四年（1348）一月、高師直が率いる足利軍が吉野に侵入して行宮を焼き払い、後村上天皇は賀名生行宮に移る。その後、長慶天皇が文中二年／応安六年（1373）八月、行宮を吉野に戻したが、維持することができず、天授五年／康暦元年（1379）九月には行宮が大和栄山寺（現・奈良県五條市）に移されていたという。

「吉野朝」とも称される南朝五十六年のうち、吉野に行宮が置かれたのは二十年弱だったようだ。

後醍醐天皇の「金輪王寺」はのちに廃寺となり、「金峯山寺」に戻る。行在所の跡は、現・金峯山寺に建てられた「妙法殿三重塔」の辺りとされている。

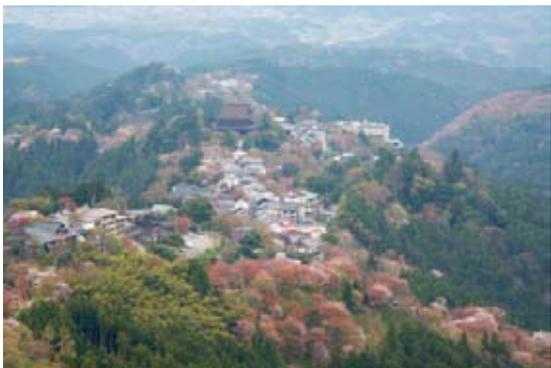
下の写真は、吉野行宮が在った吉野山

ほぼ中央に金峯山寺の本堂（国宝・

蔵王堂）が望まれる。吉野山を含む「紀

伊山地の霊場と参詣道」は世界遺産に

登録された。



<http://ryobo.fromnara.com/palace/p096-4.html>